

佳作

## 私、医療人になる

長野県 長野清泉女学院高等学校二年 大槻 葵

「医師になりたい——」

その言葉をずっと胸の奥にしまってきた。その言葉を語るのには、学力も判断力も責任感さえも極めて高く、優れた人であるべきだと思っていた。けれど私はどうだろう。テストの点数はあまり伸びず、教科書を読み進める速さも理解力も、人より劣っている。そんな私が「医師になりたい」なんて軽々しく言えるはずがない——そう思った。

「将来何になりたいの。」

高校二年生にもなればよく聞かれる。家族も友人も先生も。けれど私は、いつも曖昧にごまかしていた。本当は心の中で決まっているのに。無理だと言われるのが怖かった。医師になるということ——それは憧れと怖さが同居する夢だ。命の重み、終わりのない勉強、働き続ける覚悟。知れば知るほど、口にするのが怖くなる。

高校二年の夏、私は医学部オープンキャンパスに参加した。私の学校では、「医師になりたい」と話す同級生には出会ったことがなかった。同じ夢を語る相手のいな

い孤独や不安の中で、いつしかその想いを自分の中に閉じ込めてしまった。しかし、そのオープンキャンパスで見た光景は、私の中で何かを揺さぶった。初めて同じ夢をもつ人がこんなにもいることを知った。周りにいる見知らぬ高校生も、案内してくれた医学生も、話をしてくれた医師の先生方も、全員が「医療」の世界と向き合っている。ここでは「医師になりたい」という言葉が特別でも浮いたものでもなかった。憧れも、不安も、迷いも、そして努力までもが誰かに笑われることなく共有されていた。

「みなさんが医師を志し入学してくれることを楽しみにしています。応援しています。」

先生のその言葉が、胸に響いた。この場所では、自分の夢を語ることが怖くなかった。だってみんな同じ夢をもっているから。「医師になりたい」を誰かの前で言えること、それがこんなにも心を軽くしてくれるのだと、私は初めて知った。

その日、私はもう一つ、心を揺さぶられる出会いをした。

「形成外科はQOLを守る心の外科です。」

前でそう語ってくれたのは、形成外科の先生だった。講義で紹介されたのは、小耳症の再建手術。生まれつき耳の形が不完全な患者に、耳を「作る」手術。驚いたのは、それが聴力を回復する手術ではなかったこと。見た目——それだけのために、手術を受ける人がいる。でも

その「見た目」が患者にとって「自分らしく生きる」ために欠かせないのだと、先生の言葉から伝わった。私はそれまで、外科医は「命を救う人」だと思っていた。

生死に関わる手術、緊急の現場、そういう世界を想像していた。けれどこの手術は違った。命に直接関わらない手術でも、人の人生を前向きに変える力がある。「命を繋ぐ」だけじゃない。「心も支える」のも医療なのだ。手術室の中で生きる希望をもう一度手渡す。その姿を想像して胸が熱くなった。私の中で外科医ということがどういうことか、静かに、でも確かに変わった瞬間だった。

この道は決して簡単ではない。それはオープンキャンパスで強く感じた。会場には、想像以上の高校生がいた。「同じ夢をもつ仲間がこんなにいる」と最初は嬉しかったが、ふと気づいた。この場にいる人達は皆医学部に入りたいと望んでいる。みんな医学部合格を目指すライバルでもある。私はこの中で通用するか、合格できるか胸がざわついた。夢を語れる場所にいられる喜びと、夢を叶えることの難しさ。だからこそ本気で向き合おうと決めた。

医師になっても、毎日が幸せばかりではない。けれど、命を救い、家族に感謝され、生きたいという想いに変えられた時、そこには過酷さ以上のやりがいを感じるはず。私は人の痛みに寄り添い、責任をもって信頼される医師になりたい。私はその道を「夢」ではなく、「人生をかけても挑戦したい道」にしたい。緊張ばかりだった私だ

が、講義や説明が始まると、自然と集中力が湧き立ち、胸の中では興奮がずっと続いていった。

「ああ、やっぱり私は『医療』の世界に入りたんだ」。そう確信した。そして暑い夏の空の下で決めた。不安も、痛みも、希望も全部引き連れて私は歩いていく。誰かの人生に光を灯す、その一歩になるために。

——私、医療人になる。